

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(字数制限のある問いは、句読点・記号も一字に数える。なお、設問の都合上、一部省略した部分がある。)

生物たちは、とても立派な体をもっています。単細胞の生物だつてきわめて立派です。これほど技術が発達した現在でも、最も単純な構造をもつ単細胞生物でさえ人の手で作ることは不可能です。(A)多細胞生物の体をつくることなど到底できません。生物の体とは、それほど複雑で立派な構造物なのです。そういう立派な体をもった生物たちがずっと続いていくのですが、どんな体をしていたら、「ずっと続いていく」ことができるのでしょうか。

複雑で立派な構造物として、建築物を例にとって考えてみることにしましょう。ずっと続いていく建物はどうやって作れるのでしょうか。

単純に考えれば、1ものを建てればよいのですが、それは不可能です。熱力学の第二法則によれば、エントロピーは増大する、つまり秩序立った構造物は必ず無秩序になっていくのです。平たく言えば、形あるものは時間が経てば必ず壊れてしまいます。諸行は無常。<sup>(a)</sup>バンブツはこの法則から逃れられません。1

となると次善の策を考えねばなりません。完全に同じ物がずっと続くのが無理なら、どこかで妥協して、(B)続いているようにみなせる物を作るしかありません。妥協するとは、一部の継続性には目をつぶるということです。

絶対壊れないものを作るのが無理なら、壊れてきたらそこを補修し、また壊れたら再び補修し、と修繕を続けていけばずっと続いていくというのが一つのやり方でしょう。修繕する際には、古い部分を新しいものにとりかえます。つまりこの方法は、建築材料の継続性に少々目をつぶってしまうやり方です。世界最古の木造建築である法隆寺がこの例であり、大修理を繰り返しながら一三〇〇年もの間続いて来ました。<sup>(b)</sup>キチヨウな世界遺産です。

ただし<sup>(1)</sup>法隆寺方式を生物が採用できるかは疑問です。壊れた部分を直していくことを繰り返せば、体は新品の部分といつ壊れるかわからない古い部分とがごっちゃになってしまいます。これでは全部が新品だった当初と同じように働けるかどうかは、(C)疑問でしょう。生物は跳んだりはねたりと体を酷使します。古い部分がまじってしまったおかげで、ほんの少しでも逃げ足が遅くなれば、捕食者に食われてしまう運命が待っています。大昔につくられたものだから、世界遺産として大切にしておこうね、と捕食者が見逃してくれるものではありません。生物たちはぎりぎりのところで日々生きているのです。ちょっとでも機能が衰えたら生存競争に負けてしまいます。

生物にとっては、機能こそが大切なんですね。考えてもみて下さい。ご臨終ですと言われたって、形も、体をつくっている材料も変わってはいません。変わったのは機能がなくなったことだけです。<sup>(2)</sup>それだけで、もう生物として続いているかと言ひ渡されてしまうのです(もちろん機能が残るだけでもいいません。たとえば形と機能が残って材料がなくなってしまうえば、生物ではなく幽霊と呼ばれるようになります。機能を失って形と材料が残ったものが死体やミイラです)。

ところで機能って何でしょう。何か達成すべき目的があつて、その目的を実現するように働いているのが機能。目的がなければ機能は存在しません。死体には目的がないので機能をもっていません。風があちこち

動き回つていようとそれには目的がなく、(D)膨大なエネルギーを使つていても機能しているとは言えないし、もちろん生きているとは言えません。生物は生き残つて子孫を増やすという目的があります。それを達成すべくエネルギーを使って働くのが生物の機能。これが生物にとつてきわめて大切です。だからこそ、ずっと続いていくことにおいて、機能が継続しているかどうかが重要だと考えたいのです。

直しなおしを続けていく法隆寺方式だと創建当時のような機能を<sup>(c)</sup>ハッキリできないのなら、いつそのこと、そつくり建て直してしまえばいいという発想も出てきます。これを2にやっているのが伊勢神宮。二〇年ごとにすべてを作り替えます。神道では常若<sup>(とわわか)</sup>(常に若い状態を保つこと)がきわめて重視されますが、式年遷宮<sup>(せんぐう)</sup>はまさに常若を担保する行為です。

生物は、この伊勢神宮方式を採用しているのです。<sup>(3)</sup>新しい体をつくり、古い体は捨ててしまいます。こうすれば、いつも体は新品でばりばり働き続けることができます。

ただしこうやって作り替えた新品が、前のものが続いているものと認められるかどうかが問題になりますね。<sup>(4)</sup>伊勢神宮の建物を、一三〇〇年続いているものだと言えるかどうかという疑問です。

普通は言えないでしょう。でも、ここでは「何が続いているのか」を考えてみる必要があります。存在物にはそれを作っている材料と形とがあり、この両方が同じでなければ、続いているとは厳密には言えません。ただし形と材料とでは、われわれは形の方を優先します。形が同じでなければ同じものとは呼ばないのですね。これはヒトという生物の性<sup>(さが)</sup>です。ヒトの感覚情報の大半が視覚情報であり、私たちが形を極端に重視する生物だからです。

形に関しては、法隆寺も(そしてたぶん)伊勢神宮も昔と変わってはいません。問題は材料です。伊勢神宮の場合、材料の継続性はまったくありません。法隆寺は創建当時の材料がある程度は残っています。厳密なことを言えば法隆寺もずっと続いているとは言えないのですが、形を重視する生物であるヒトは、法隆寺のように材料の継続性をそれなりに保とうとしているならば大目に見て、続いていると認めてしまいます(修理を続けていけば、しまいは創建当時の材料は礎石<sup>(せそ)</sup>以外なくなってしまうでしょうが、それでも法隆寺は続いているとわれわれは認めるでしょうね)。

普通、続いているかどうかは形と材料についてだけ考えます。しかし建物や、とくに生物の場合、機能にも目を向ける必要があると思うのですね。建物は使つてこそ意味があるのであり、もし立ち入り<sup>(d)</sup>キンシにして世界遺産として眺めるだけになってしまったら、それは創建当時の機能をもたず、同じ物が続いていることにはならないのではないのでしょうか。

伊勢神宮は3の継続性をきれいさっぱり犠牲<sup>(ぎせい)</sup>にして、4の継続性の完璧<sup>(かんぺき)</sup>さを求めたものです。

どのみち熱力学の第二法則がありますから、ずっと続く建物は作れません。だから形・材料・機能のうちのどれかに目をつぶって他の継続性ができるだけ保つという妥協案をとる以外、方法はありません。形が同じであることは「同じ」と呼ぶ大前提ですので、目をつぶるのは材料か機能。その際、機能よりは材料の継続性を大事にするのが法隆寺方式、機能を重視するのが伊勢神宮方式です。このように機能まで考慮に入れば、法隆寺も伊勢神宮も、どちらもずっと続いていると言えると思ふのですね。そして生物も親から子へと、ずーっと続いていると言えると私は思います。

問1 二重傍線部②「バンブツ」、③「キチヨウ」、④「ハッキ」、⑤「キンシ」のカタカナを漢字に改めよ。

問2 空欄（A）（D）に入る語を次のア～オの中からそれぞれ選び、記号で答えよ。

ア たとえ      イ 必ずしも      ウ あたかも  
エ ましてや      オ はなはだ      カ すこしも

問3 1 に共通して入る語句を本文中から六字で抜き出せ。

問4 傍線部①「法隆寺方式を生物が採用できるかは疑問です」とあるが、筆者がそのように考える理由を説明したものとして最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えよ。

ア 全てが新しくなった生物の体は、時間の経過とともに徐々に古くなっていくため、古い部分をいつ新しいものにとりかえればいいか分からないから。

イ 生物は自分自身で体の中の新しい部分と古い部分を見分けることができず、また、新しいものにとりかえることもできないから。

ウ 体を酷使しながら生物は生きており、体の新しい部分もすぐに古くなってしまったため、新しいものを作るための時間的な余裕がないから。

エ 生物は体の中に新しい部分と古い部分とが混在してしまうと、全てが新しくなった場合と同様の機能を果たせるかどうか分からないから。

オ 生物は厳しい生存競争の中で暮らしており、体の中の古くなった部分を直している間に捕食者から食べられてしまう可能性があるから。

問5 傍線部②「それだけで、もう生物として続いていると言いつたってしまう」とあるが、なぜ「生物として続いている」といえるのか。その理由を述べた次の文の空欄（ア）（イ）（ウ）に入る語句をそれぞれ本文中から抜き出せ。ただし、（ア）は二字、（イ）は六字、（ウ）は十一字である。

（ア 二字）は（イ 六字）ために（ウ 十一字）ことができないから。

問6 2 に入る語句として最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えよ。

ア 効果的      イ 日常的      ウ 批判的      エ 定期的      オ 一時的

問7 傍線部③「新しい体をつくり、古い体は捨ててしまいます」とあるが、「新しい体」、「古い体」とは何のことか。本文中から漢字一字でそれぞれ抜き出せ。

問8 傍線部④「伊勢神宮の建物を、一三〇〇年続いているものと言えるかどうか」とあるが、筆者は後半部分で「続いていると言える」と述べている。その理由を「創建当時」「参拝」の二語を必ず用いてわかりやすく四十五字以内で答えよ。

問9 3 ・ 4 に入る最も適当な語を本文中からそれぞれ抜き出せ。

問10 本文の内容に合っているものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 現在、単細胞生物でさえ人間は作り出せないが、近い将来、科学技術の進歩によって、単純な構造の生物であれば、作ることができるようになるだろう。

イ 法隆寺は壊れた箇所を何度も行ってきたことで今日まで保たれており、創建当時の機能はすでに失われているため、厳密にはずっと続いているとは言いがたい。

ウ 伊勢神宮では、建物の状態を常に若く保つために式年遷宮という制度を取り入れており、法隆寺のように壊れた箇所の補修を行うことは全くない。

エ 熱力学の第二法則によりずっと続く建物は作れないので、形・材料・機能のうちのどれか一つに目をつぶって継続性を保つしかない。

オ 感覚情報の大半を視覚に頼る私たちは、形を極端に重視する傾向があり、形が同じであることが「ずっと続いている」と認識する上での大前提である。

次の文章は、小学5年生の「わたし」が母の実家に帰省し、「きつつあん」（帰省先での顔なじみ）から「木のイヌ」のお守りを借りて、いとこの「孝太」と地域のきもだめしに参加することになった場面である。よく読んで、後の問いに答えよ。（字数制限のある問いは、句読点・記号も一字に数える。）

会場は寺の墓地だった。

寺の山門にいてみると、おとなたちが何人も集まっていて、そのまわりに子どもたちがいた。みな、男の子ばかりだった。かぞえてみると、全部で十八人だった。

きもだめしのルールは、それぞれ、自分の名前の書かれた小さな木の札をわたされ、ひとりで墓地を通り、それを寺の本堂にいる住職にわたして帰ってくるというものだ。いきと帰りはコースがちがついて、運動会るとき、運動場に白い線をひく機械を使って、墓地の地面にコースがしめされていた。

月が出たばかりで、明るかった。月光の下、墓地にひかれた白線は、まるであの世につづいているようで、不気味だった。

月が明るいうことで、懐中電灯もちょうちんも持たされなかった。

順番はくじで決められた。わたしは、最後から三番目だった。孝太さんは最初から五番目で、わたしより先に終わっていたが、終わった者はまだの者と（A）をきいてはいけないルールだったので、もどつてきて、わたしとはなれたところに立っていた。

いよいよわたしの番になった。

わたしはズボンのポケットの中の木のイヌを右手でにぎりしめて、歩きだした。

「あれ、きぬちゃんこの子だろ。東京の子にできるのか。」

だれかが心配そうにそういったのが、うしろからきこえた。おとなの声だった。

どんなにこわくても、声をあげたり、走ったりしてはいけない。

①わたしは自分にそっくりいかせた。そして、なるべくゆっくり歩いた。それにはふたつ理由があった。あまり早く帰ってしまうと、こわいからいそいだのだろうと、そういわれるのではないかと思ったのがひとつ。それから、もうひとつ。男の子が墓地でころぶと早死にするという<sup>a</sup>メイシンがあつたからだ。わたしは、いそいでころびたくはなかった。

わたしは、地面にひかれた白い線をふまないようにして歩いた。

右も左も、墓石や塔婆<sup>とうば</sup>だらけだった。

わたしは、よけいなところは見ないようにして、ひたすら白線だけを見て歩いた。

むし暑い夜で、風はなかった。

孝太さんは、墓石のうしろにおとながかくれていて、おどかすことになっていると聞いていたが、ずいぶん歩いても、だれかがかくれているようすはなかった。

ところが、少し先に本堂の屋根が見えたとき、どこから声がきこえてきた。

声のするほうを見ると、小さな赤い光がぼつりと見えた。

そんなに遠くではない、というより、それはもう（B）と（C）の先といったほうがいくらかの距離だった。

タバコのおいがした。

止まっていけないというルールはなかったから、わたしは立ちどまって、（D）をすませた。

「ピッチャー、第三球、ふりかぶって、投げました！ ストライーク！ 三球三振！ チェンジです！」

それは、ラジオのプロ野球放送にちがいなかった。

だれかが、タバコを吸いながら、ラジオで野球をきいているのだ。

ラジオの音につづいて、肉声がきこえた。

「だめだな、きょうは。これで、三振、四つもとられた。なんで国鉄あいてに、こんなに打てないんだ。もう、ラジオ消せよ。子どもにきかれて、あとでいいつけられたら、おまえたち、なにやってたんだってことになる。」

「だいじょうぶだ。次は東京からきてる子だ。臆病<sup>おくびょう</sup>にきまつてる。ここまでこれっこない。とちゅうでひきかえすから、その次のくるまで、時間がある。それより、ひとりで吸ってないで、おれにも一本よこせよ。それ、ピースだろ。いいタバコ吸ってるじゃないか。」

だれとだれが話しているのかはわからなかったが、それをきいて、わたしはものすごく腹が立った。

母の実家の近所のおとなたちは、ひるま、わたしと道ですれちがうと、みな、にこにこして、話しかけてくる。

「いつきたんだ？」

とか、

「今年はいつまでいるんだ。」

とか、場合によっては、

「あとで、うちでできたトウモロコシをとどけてやるから、ゆでてもらえ。」

とか、そんなことをいつてくれるおともいいる。

きもだめしは、村の中でも、母の実家のある地域の子どもたちだけがするものだから、きているおとなたちも、遠くからきている者はいないはずだ。しかも、わたしが参加していることを知っているのだから、ふたりは近所のだれかにきまつている。

近所のおとなたち全部でないことはわかるが、少なくともひとりとは、ふだん、顔ではにこにこしながら、わたしのことを臆病にきまつていると、さげすんでいたのだ！

②そこまでの恐怖が怒りにかわった。

⑦タバコの火がふたつになった。

わたしは足音をたてないようにして、ふたりがいるうしろの墓石にしのびよった。そして、（E）をころして、しばらく待った。

墓石の横からのぞいている足で、ふたりが墓の石段に腰かけていることがわかった。

わたしは、ふたりがタバコを吸いおわるのを待ちたかった。少しでも暗いほうが効果があると思ったからだ。だが、あまり遅くなると、だれかべつの人がようすを見にきてしまうかもしれない。

野球放送はコマーシャルになり、新しい回が始まった。

③さて、国鉄スワローズの攻撃は……。

アナウンサーがそういったとき、わたしは墓石の横からとびだした。

そのときのようにすを思い出すと、今でもわたしはおかしくて笑ってしまう。

わたしは木の札を右手に持ったまま両手の人差し指を目じりにあてて、アッカンペーをしながら、

「グエーッ！」

とか何とか、さげんだと思う。

そこにいたのは、わたしの知らない青年ふたりだった。

人間、おとなでも、<sup>③</sup>フイをつかれるとそうなるのかと、こちらがかえって驚くくらいの反応があった。

こちらに背をむけて、墓の石段に腰かけていたほうは、石段からころげおちた。もうひとり、こちらをむいていたほうは、のけぞって、うしろにたおれた。たおれるとき、ラジオをたおしたのだろう。スピーカーのある面が地面についたにちがいない。音がぐもった。

階段からおちたほうが、起きあがろうとして、近くの塔婆をつかんだ。塔婆がぬけて、その先がもうひとりにあたり、いやな音をたてた。

「いてっ！」

と声がしたとき、わたしは近くの墓石のうしろにかくれた。そして、そのままそとその場をはなれた。それから、<sup>④</sup>ゆっくり本堂にいき、住職に木の札をわたした。

「おそかったな。おぼけは出たか？」

住職はそういつて、笑いながら、紙の袋に入ったお菓子をくれた。

わたしがもどつてくると、孝太さんは菓子袋の手にして、ほっとしたような顔で、わたしを出むかえた。

わたしの考えすぎかもしれないが、その顔には、

I がうかんできた。

ほかのおとなたちにまじって、山門の近くに、きつつあんがいた。わたしはポケットから木のイヌを出して、そつときつつあんにかえした。

終わった者は帰っていいことになっていたので、わたしと孝太さんはそれでひきあげてきた。

次の日にわかったことだが、墓石のうしろにいたのは、となりの地区から応援にきていた若い青年団のふたりだった。

近所のだけかだと思いこんで、おどかしたことをわたしは後悔した。

わたしのあとからいったのは中学三年生だったが、その子が、墓石のうしろで、けがをしているふたりを見つけたのだ。

「くそ、いてえなあ……。血が出ちゃったじゃねえか。」

という声をききつけ、幽霊のおどしもんくとして、

「くそ、いてえなあ……。」

はともかく、

「血が出ちゃったじゃねえか。」

はへんだと思い、のぞいてみたところ、ふたりはひざをかかえ、もうひとりは頭に手をあてて、地面にすわっていたという。

中学生は本堂にいつて、見たまま、きいたままを住職に<sup>⑤</sup>ホウコクした。それで、ふたりは、かけつけた中学生に聞いただされ、タバコを吸いながら、ラジオでナイター放送をきいていたら、東京からきた子におどかされた<sup>⑥</sup>とハクジョウしたらしい。

そのことは翌日、<sup>④</sup>伯父が寺できいてきて、わたしと孝太さんに話してくれた。

寺からの帰り道、わたしは孝太さんにもできごとを話していなかったから、伯父から話をきいて、孝太さんは驚いていた。

(斉藤 洋『遠く不思議な夏』より)

問1 二重傍線部<sup>①</sup>「メイシン」、<sup>②</sup>「フイ」、<sup>③</sup>「ホウコク」、<sup>④</sup>「ハクジョウ」のカタカナを漢字に改めよ。

問2 空欄(A)―(E)に漢字一字をそれぞれ補え。

問3 傍線部<sup>①</sup>「わたしは自分にそっくりいさせた」のは、なぜか。その説明として最も適当なものを次のア

イオの中から選び、記号で答えよ。

ア おとなたちに自分のことを心配してもらえたので、しっかりしなければいけないと思ったから。

イ おとなたちの自分には無理ではないかと話す声を聞き、その言葉に負けたくないと思ったから。

ウ おとなたちの自分への心配は気にせず、とりあえずマイペースでいることが大切だと思ったから。

エ おとなたちが教えてくれた墓地でころぶと早死にするという話を本当のことだと思ったから。

オ おとなたちが期待している東京の子のふがいない姿だけは絶対に見せたくないと思ったから。

問4 傍線部<sup>②</sup>「そこまでの恐怖が怒りにかわった」について、次の問いに答えよ。

(1) 「そこまでの恐怖」とあるが、「わたし」がきもだめしに「恐怖」を感じていることがわかる記述を

二箇所、本文中から三十五字以上四十字以内の一文でそれぞれ抜き出し、そのはじめの七字を答えよ。

(2) 「怒りにかわった」とあるが、なぜ「わたし」は「怒」ったのか、「さげすむ」という語の意味を明らかにしながら四十字以内で答えよ。

問5 次の資料はこの文章の設定の時代のプロ野球に関するものである。この資料を参考にして傍線部③「さて、国鉄スワローズの攻撃は……」の説明として最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えよ。

| ○1962年セントラルリーグチーム勝敗表 |     |    |    |    |      |      |
|----------------------|-----|----|----|----|------|------|
| チー ム                 | 試合  | 勝利 | 敗北 | 引分 | 勝率   | ゲーム差 |
| 阪神タイガース              | 133 | 75 | 55 | 3  | .577 | —    |
| 大洋ホエールズ              | 134 | 71 | 59 | 4  | .546 | 4.0  |
| 中日ドラゴンズ              | 133 | 70 | 60 | 3  | .538 | 5.0  |
| 読売ジャイアンツ             | 134 | 67 | 63 | 4  | .515 | 8.0  |
| 広島カープ                | 134 | 56 | 74 | 4  | .431 | 19.0 |
| 国鉄スワローズ              | 134 | 51 | 79 | 4  | .392 | 24.0 |

○1962年セントラルリーグチーム本拠地

阪神タイガース（兵庫県・甲子園球場）

大洋ホエールズ（神奈川県・川崎球場）

中日ドラゴンズ（愛知県・中日球場）

読売ジャイアンツ（東京都・後楽園球場）

広島カープ（広島県・広島市民球場）

国鉄スワローズ（東京都・後楽園球場）

ア 資料によると「国鉄スワローズ」は敗北の数が一番多いことがわかる。しかし東京の子である「わたし」にとっては故郷の愛すべき球団であって、勝ち負けに関係なく応援するチームである。そんな弱小チームの優勢を伝えるラジオの声がびくびくしていた「わたし」に勇気を与えている。

イ 資料によると「読売ジャイアンツ」と「国鉄スワローズ」は東京に本拠地を置いており、ライバル球団といえる。この関係は「青年ふたり」対「わたし」という構図でもある。だから「攻撃」を伝えるラジオの声は「青年ふたり」対「わたし」の激しい戦いがはじまったことを暗に示している。

ウ 資料によると当時は「阪神タイガース」が強く、「国鉄スワローズ」が弱かったことがわかる。関西の球団である「阪神タイガース」を「青年ふたり」が応援していることから、帰省先が関西方面であることがわかり、ラジオの声は東京の子である「わたし」のひとりぼっちの寂しさを代弁している。

エ 資料によると「国鉄スワローズ」は東京に本拠地を置く弱小球団である。「わたし」は「東京の子」としてまわりからひ弱なイメージを持たれており、「国鉄スワローズ」のイメージと重ねることができ。そんな「わたし」が「青年ふたり」に攻撃をしかけることをラジオの声に合わせて表現している。

オ 資料によると「国鉄スワローズ」は勝率が四割をきる、最下位の球団である。それがこの日の「国鉄スワローズ」は優勢に試合を進めることができており、その勢いを伝えるラジオの声に「わたし」は背中を押され、ふだんなら考えられないような行動に出ることのきっかけとなっている。

問6 傍線部⑦「タバコの火がふたつになった」から、傍線部④「ゆっくり本堂にいき、住職に木の札をわたした」までの場面をことわざを用いて説明した文として正しいものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア わたしは鴨がねぎをしょっていくかのようにふたりがいるうしろの墓石にしのびよった。

イ 暗くなるのを蛇ににらまれた蛙のように待ち、機会をねらってわたしは墓石の横からとびだした。

ウ ふたりは油断しきっていたので狸が人に化かされたようにわたしから逆におどかされてしまった。

エ あまりにもびっくりしてしまったふたりは猿が木から落ちるように石段から転げ落ちてしまった。

オ わたしは立つ鳥があとをにござないように何事もなかった顔でそっとその場をはなれた。

問7 

I

に入る最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えよ。

ア 一族の名誉がこれで守られたというような表情

イ いとこがしでかしてしまった不始末へのおびえ

ウ 大仕事をやりとげたわたしへの賞賛のほほえみ

エ これでやっと家に帰ることができるといふ喜び

オ 遅かったことに対するいらいらしたような不満

問8 傍線部④「伯父が寺できてきて、わたしと孝太さんに話してくれた」とあるが、「伯父の話」には、このままでは文意が通じない箇所が二箇所ある。改めるべき語を五字以内でそれぞれ抜き出し、文意が通じるように正しい語に直せ。

問9 本文はおとなになった「わたし」が小学生の頃を回想している文章である。そのことがはっきりわかる一文を本文中から抜き出し、そのはじめの五字を答えよ。

三 次の詩を読んで、後の問いに答えよ。

暖

おふろ  
ストーブ  
まどのあかり  
あったかさにも いろいろあるけど

⑦ 暖という字は  
みているだけで  
なんだか ほっこり  
あったかい

それはね  
字のなかに  
お日さまと  
(A) がいるからだよ

⑩ いっしょだと  
⑨ 日だまりにいるみたいな  
(A) でいたいな  
わたしもだれかの

(杉本深由起『漢字のかんじ』より)

問1 第一連について次の問いに答えよ。

- (1) 次の文章の空欄①～⑩には「寒い」「冷たい」「暖かい」「温かい」のいずれかが入る。空欄①～⑩のなかで「温かい」が入る空欄の番号をすべて答えよ。

「あたたかい」の反対語には「( ① )」と「冷たい」の二語がある。「寒い」の反対語である「あたたかい」を漢字で記すと「( ② )」であり、「冷たい」の反対語は、「( ③ )」である。そして「あたたかい」の使い方は、その反対語との組み合わせから考えることができる。たとえば「寒い部屋」に対しては「( ④ )部屋」となり、「冷たいスープ」に対しては「( ⑤ )スープ」となる。また、( ⑥ )

は温度だけでなく、「彼は心の( ⑦ )人だ。」のように人の心や感情に対しても用いることがある。それで、反対語も「彼に( ⑧ )態度をとる」と言うことはあっても「彼に寒い態度をとる」とは言わない。このように考えると「( ⑨ )」は温度ばかりでなく愛情や思いやりを感じるときにも使い、「( ⑩ )」は主に気温や気象について用いられているといえる。

- (2) (1)の文章を踏まえて、詩中の「おふろ」「ストーブ」は「温かい」「暖かい」のどちらを用いる方がよいか、それぞれ答えよ。

- (3) 「まどのあかり」が表していることとして最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えよ。  
ア 母親の温もり      イ 家族の団らん      ウ 高層ビルの夜景  
エ 真夜中の寂しさ      オ 暖炉の炎

- (4) 「あたたかい」と同じように読み方が同じで用い方が異なる語に「あつい」があるが、次のア～カの各文で「あつい」の用い方として正しくないものを二つ選び、記号で答えよ。

- ア 鉄は熱いうちに打て。  
イ 暖房が効きすぎて暑い。  
ウ 雲が厚くたれこめている。  
エ このお茶は暑くて飲めない。  
オ 研究への厚い思いを語る。  
カ 胸をうたれて目頭が熱くなる。

- 問2 傍線部⑦「暖という字」とあるが、「暖」とは異なる部首の漢字を次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 書    イ 昔    ウ 早    エ 昼    オ 星

- 問3 空欄(A)に入る適当な語を答えよ。

- 問4 傍線部④「いっしょだと」の「と」と同じ用法を次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア こどもと散歩にでかける。  
イ 犬の名前をぼちと決めた。  
ウ まっすぐ行くと郵便局がある。  
エ 急に飛び出して危ないと思った。  
オ 紅茶とケーキを注文する。

問5 傍線部㊦「日だまりにいるみたい」なとあるが、「日だまりにいる」とはどういう状況をたとえたものか。最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えよ。

ア 力強く励ましてくれる

イ やさしく包みこんでいる

ウ 自然と笑顔になれる

エ お互いに許しあえる

オ 激しく競いあっている

|         |  |  |
|---------|--|--|
| 受 験 番 号 |  |  |
|         |  |  |
| 氏 名     |  |  |
|         |  |  |

中学校 国 語 (六十分)

一

|      |     |  |  |             |     |     |     |     |
|------|-----|--|--|-------------|-----|-----|-----|-----|
| 問 9  | 問 8 |  |  | 問 6         | 問 5 | 問 3 | 問 2 | 問 1 |
| 3    |     |  |  |             | ウ ア |     | A   | ㉑   |
| 4    |     |  |  | 問 7<br>新しい体 |     |     | B   | ㉒   |
|      |     |  |  |             |     | イ   |     |     |
|      |     |  |  |             |     |     |     |     |
|      |     |  |  |             |     |     |     |     |
|      |     |  |  |             |     |     |     |     |
|      |     |  |  | 古い体         |     | 問 4 | D   | ㉓   |
|      |     |  |  |             |     |     |     |     |
|      |     |  |  |             |     |     |     |     |
|      |     |  |  |             |     |     |     |     |
|      |     |  |  |             |     |     |     |     |
| 問 10 |     |  |  |             |     |     |     | ㉔   |
|      |     |  |  |             |     |     |     |     |
|      |     |  |  |             |     |     |     |     |
|      |     |  |  |             |     |     |     |     |
|      |     |  |  |             |     |     |     |     |
|      |     |  |  |             |     |     |     |     |
|      |     |  |  |             |     |     |     |     |
|      |     |  |  |             |     |     |     |     |
|      |     |  |  |             |     |     |     |     |
|      |     |  |  |             |     |     |     |     |

二

|     |     |   |     |     |     |     |     |
|-----|-----|---|-----|-----|-----|-----|-----|
| 問 9 | 問 8 |   | 問 5 | 問 4 |     | 問 2 | 問 1 |
|     | ・   | ・ |     | (2) | (1) | A   | ㉑   |
|     |     |   | 問 6 |     | ・   | B   | ㉒   |
|     |     |   |     |     |     |     |     |
|     |     |   |     |     |     |     |     |
|     |     |   |     |     |     |     |     |
|     |     |   |     |     |     |     |     |
|     |     |   | 問 7 |     |     | C   | ㉓   |
|     |     |   |     |     |     |     |     |
|     |     |   |     |     |     |     |     |
|     |     |   |     |     |     |     |     |
|     |     |   |     |     |     |     |     |
|     | ↓   | ↓ |     |     |     | D   | ㉔   |
|     |     |   |     |     |     |     |     |
|     |     |   |     |     |     |     |     |
|     |     |   |     |     |     |     |     |
|     |     |   |     |     |     |     |     |
|     |     |   |     |     |     |     |     |
|     |     |   |     |     |     |     |     |
|     |     |   |     |     |     |     |     |
|     |     |   |     |     |     |     |     |
|     |     |   |     |     |     |     |     |

三

|     |      |     |
|-----|------|-----|
| 問 4 | 問 1  |     |
|     | (3)  | (1) |
| 問 5 |      | ㉕   |
|     | (4)  |     |
|     |      |     |
|     |      |     |
|     |      |     |
| 問 2 |      |     |
|     | (2)  |     |
| 問 3 | おふろ  |     |
|     |      |     |
|     | ストーブ |     |
|     |      |     |